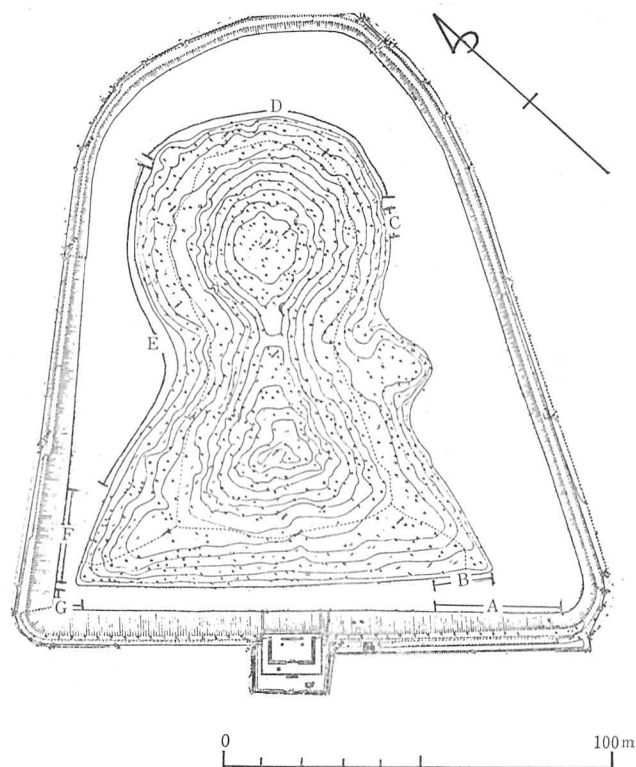




第19図 埴生坂本陵遺物出土地点（約1/2000）

向ける前方後円墳である。長年の波浪により墳壁裾等の侵食が進んできたことから、護岸を目的とした整備工事が計画され、平成三年度に事前調査を実施した。その結果は本誌前号において報告したが、今回は実際の工事に立ち会って、遺構、遺物の発見に努めた。その結果、円筒埴輪、葺石などの遺構は検出されず、工事は予定通り施工した。

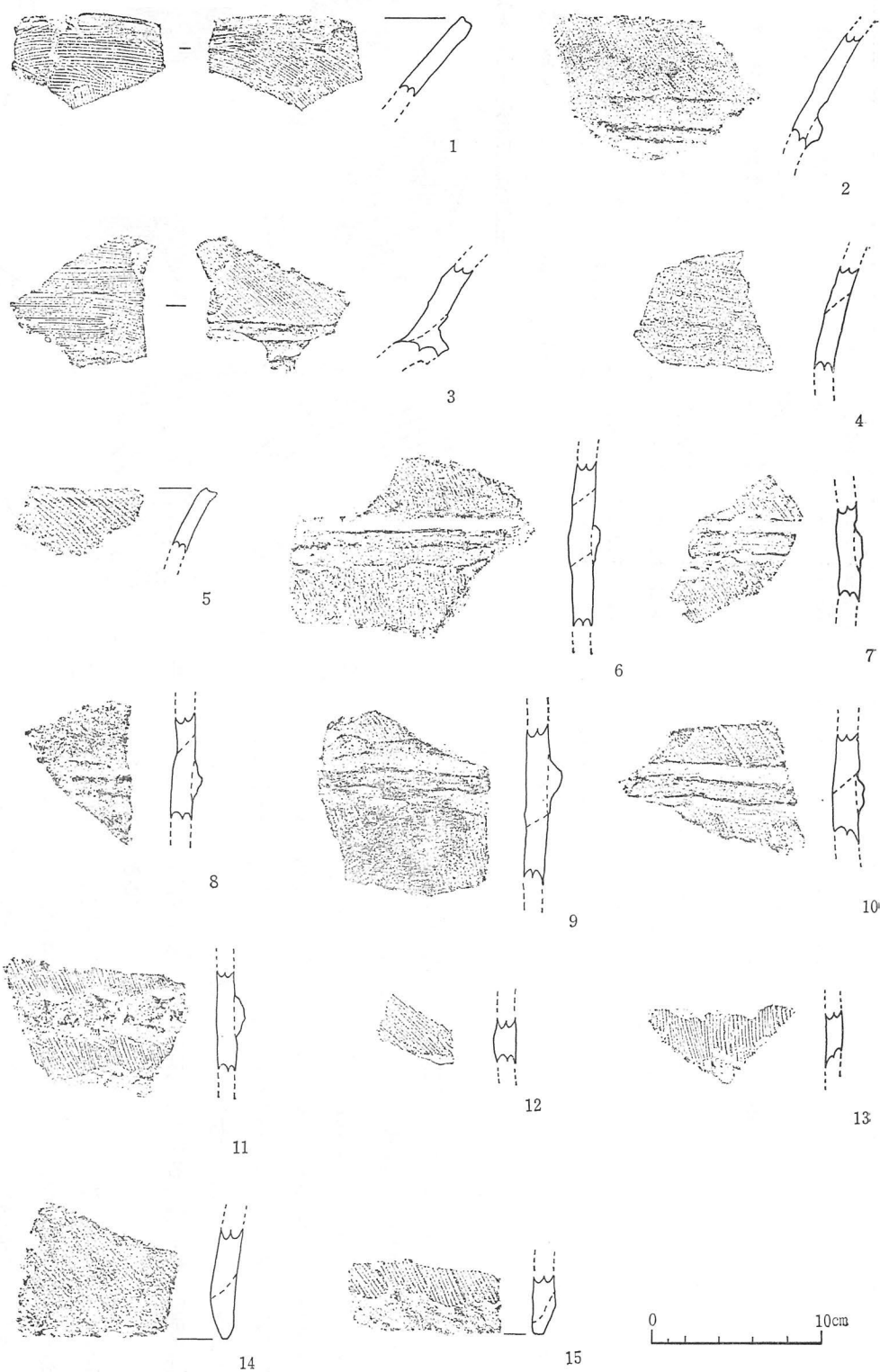
なお、護岸用のフトン籠に使用した石材は大阪府和泉市榎尾山で採取された直径一五〇～三〇〇ミリの花崗岩系の割栗石である。

立会調査の際に以下に述べる遺物が採集された。出土した層位は表土から濠内堆積土であり、原位置を保つものではなく、各個体の出土地点は第19図のA～Gの箇所と観察表の記号とによって対照できるものとする。

今回採集された遺物は合計八二点であり、うち埴輪片は六八点を数える。他に須恵器片六点、土師器片、瓦片、陶磁器片が若干出土した。しかし、瓦、陶磁器についてはいずれも小破片であり図化していない。事前調査の際に出土せず、今回出土した遺物としてはいわゆる湊焼と称される甕の破片が一点出土している。

埴輪については、前回および昭和五十九年度の外堤裾の調査（本誌第三七号参照）の際に出土した埴輪と基本的な特徴は一致する。器種としては円筒埴輪、朝顔形埴輪があり、明確に形象埴輪と断定できる個体は出土していない。焼成については軟質のものと硬質のものがあるが、黒斑の付着した資料は一点も認められない。外面の調整は左上りのナメハケ調整を基本とし、内面の調整はナデ調整のみであるが、朝顔形埴輪のラップ状に開く部分の内面には刷毛による調整が施されている。突帯はいずれも突出度が低く、粘土紐を巻き付けたあと横ナデを加えている。よって断面形は低い台形か、三角形を呈するが、第20図11に示したものは断続ナデのみを施したもので、最下段の突帯であると思われる。全体の径を正確に復元できるほどの大きさをもつ破片はないが、あえて復元すれば二〇センチから二五センチほどになるものであろう。

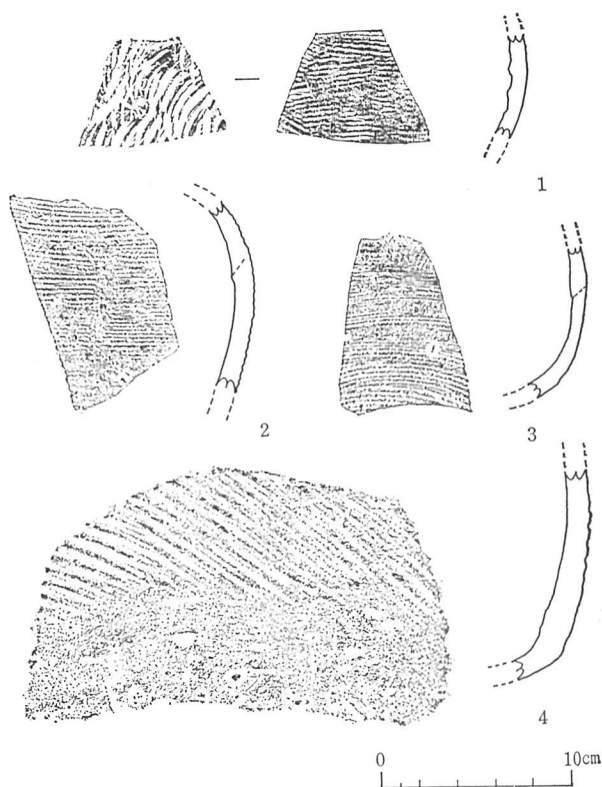
須恵器は六点出土しているが、いずれも甕か壺の底部から肩部にかけ



第20図 埴生坂本陵の出土品(1) (1/4)

挿図番号	器 種	焼 成	胎 土	色 調	調 整 等 個 体 の 特 徴	位 置
20—1	朝顔形埴輪 口縁部	堅緻	緻密 1~2mm 角の砂粒を含む	外面…淡黄褐色 内面…淡褐色	内外面とも口縁端部から1センチほどをヨコナデ調整する。その下はナナメハケ調整、内面はヨコハケ調整を施す。	E
20—2	朝顔形埴輪 朝顔部	良	緻密 0.5~2mm 角の砂粒を含む	外面…乳褐色 内面…乳褐色	全体に摩耗が激しい。外面は1センチ当たり、4~5条のナナメハケ調整を施す。内面にはヨコナデ調整を施している。突帯にも同様のヨコナデ調整を施す。	G
20—3	朝顔形埴輪 口頸部	堅緻	緻密 0.5~2mm 角の砂粒を含む	外面…淡褐色 内面…暗灰褐色	硬質感のある個体で突帯の張り出しも大きい。外面はナナメハケ調整を施し、内面も同様のヨコハケ調整を施す。	C
20—4	朝顔形埴輪	堅緻	緻密 0.5~2mm 角の砂粒を含む	外面…灰褐色 内面…明褐色	内・外面ともハケ調整を用いず、ヨコナデ調整のみを施す。	E

表1 埴生坂本陵出土品観察表



第21図 埴生坂本陵の出土品(2) (1/4)

ての破片と思われるが、全体の形状を知ることとはできない。外面の調整はカキメの施された個体とタタキ調整によって仕上げたものがあるが、第21図1に示した個体はタタキ調整のあとわずかにナデ調整が加えられているようである。

そのほか第21図4に示したものは、いわゆる湊焼の甕の底部付近の破片である。底部付近を幅五センチほどにわたってケズリ調整を施し、その上は左上りの粗いタタキ調整(二~三条/センチ)を施している。内面については器壁がかなり摩耗していることもあると思われるが、現状ではハケによる調整は認められない。焼成は完全な土師質を呈し、そのほかの調整などから一六世紀末から一七世紀初頭の資料と考えられる。その他、各個体の詳細については観察表を参照されたい。

20 — 14	円筒埴輪 底部	良	緻密 0.5 ~ 3 mm 角の砂粒を含む	外面…淡黄褐色 内面…淡黄褐色	全体に摩耗が激しい。最下段にはユビオサエの痕跡が認められ、接地する面積は小さい。外面はナナメハケ調整、内面は縦方向のナデ調整が認められる。	G
20 — 13	円筒埴輪 胴部	堅緻	密 最大5 mm角 のチャート系砂 粒を含む	外面…暗灰褐色 内面…暗灰色	非常に硬質の焼成で、半須恵質を呈する。外面はタテハケ調整を施し、内面にはナデ調整が認められる。	E
20 — 12	円筒埴輪 胴部	堅緻	緻密 若干の砂 粒を含む	外面…暗茶褐色 内面…暗褐色	硬質感のある個体。外面はナナメハケ調整を施し、内面にはナデ調整が認められる。	D
20 — 11	円筒埴輪 胴部	堅緻	緻密 0.5 ~ 3 mm 角の白い砂粒を 含む	外面…淡褐色 内面…淡茶褐色	外面はナナメハケ調整、内面は縦方向のナデ調整が認められる。突帯は断続ナデ調整で最下段の突帯と思われる。	B
20 — 10	円筒埴輪 胴部	堅緻	緻密 0.3 ~ 3 mm 角の砂粒を含む	外面…淡黄褐色 内面…淡黄褐色	外面にはナナメハケ調整が施され、ハケの原体幅は2.2センチ程と推定できる。裏面にはナデ調整が認められる。	A
20 — 9	円筒埴輪 胴部	良	緻密 0.3 ~ 3 mm 角の砂粒を含む	外面…淡褐色 内面…淡茶褐色	全体に摩耗が激しいが、他個体に比べやや粗いナナメハケ調整が認められる。突帯の突出度は比較的高く、ヨコナデ調整を施す。	G
20 — 8	円筒埴輪 胴部	良	緻密 砂粒は含 むものの他個体 よりは少ない	外面…淡褐色 内面…淡褐色	全体に摩耗が激しく、内・外面の調整は不明。突帯の断面形は低い三角形を呈する。	E
20 — 7	円筒埴輪 胴部	堅緻	緻密 0.5 ~ 4 mm 角のチャート系 の砂粒を含む	外面…灰褐色 内面…灰褐色	外面はナナメハケ調整を施し、突帯はヨコナデ調整である。突帯の突出度は低い。内面にはユビオサエ痕を残す。	A
20 — 6	円筒埴輪 胴部	良	緻密 0.5 ~ 4 mm のチャート系の 砂粒を含む	外面…淡黄褐色 内面…淡黄褐色	全体に摩耗が激しい個体。外面はタテ・ナナメハケ調整を施し、内面はナデ調整を施している。内面には粘土の接合痕を残す。	G
20 — 5	円筒埴輪 口縁部	良	緻密 0.5 ~ 2 mm 角の砂粒を含む	外面…淡褐色 内面…淡褐色	やや外反する円筒埴輪の口縁部。復元口径は22センチほど。外面はナナメハケ調整を施す。内面・口唇部はナデ調整を施す。	G

21 — 4	21 — 3	21 — 2	21 — 1	20 — 15
湊焼底部	須恵器片	須恵器片	須恵器片	円筒埴輪 底部
良	堅緻	堅緻	堅緻	堅緻
良 2～8mmの 砂粒を含む	緻密	緻密	緻密	緻密 0.5～1mm 角の砂粒を含む
外面…淡茶褐色 内面…淡灰褐色	外面…灰色 内面…灰色	外面…灰白色 内面…灰白色	外面…暗灰色 内面…灰色 断面…紫灰色	外面…暗褐色 内面…暗褐色
完全に土師質の広義の湊焼である。外面は粗いタタキ痕とケズリ調整がなされ、内面にはナデによる調整が施される。	甕・壺の底部付近の破片。外面はカキメ文が残り、内面は回転ナデ調整が施される。	甕、もしくは壺の胴部片と思われる。外面にはカキメ文が残り、内面には回転ナデ調整が施される。	甕、もしくは壺の胴部片と思われるが断定はできない。外面はタタキ調整の後わずかにナデ調整が施されているようにみえる。内面には同心円文のあて具痕を残す。	復元径は約20～25センチになると思われる。最下段にはユビオサエを施し、底面には紐状の庄痕を残す。
C	F	F	F	G

(徳田 誠志)